
兵士不純41 50

猫離脱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兵士不純41 50

【著者名】

N4232

【作者名】 猫離脱

【あらすじ】
兵士不純41～50
小休止

41

ぎくしゃくしていた。

日々の生活にかけりが見え始めた。

ささいなことで、真実かわからぬことで。見えないことで。
二人は一人がそれそれわかっていることを整理もせずに解決していった。

同じことを繰り返しているはずが美しくなかつた。

足りなかつた。美しいときがゆっくり巻き戻されていくようだつた。

42

そしていそいでいた。

先回りをして物事が動くようだつた。ものを貯めて必要なときに必要なことをしなくなつた。きまりを守らなくなつた。

田上は釣りを止め酒を飲まなくなつた。

美緒は散歩に行つてもすぐ帰り冷蔵庫の中が満杯になつた。

天井の蜘蛛が一匹減つた。

43

寝ないで考えたのだそうだ。

考えたのは余計だし寝ないのも余計だと思ったが聞いていた。
杜氏になにかあつた。と思う、のだそうだ。

私はええと答えた。

夢の話をしてくれた。

私は朝一緒にでた散歩の時の話をした。

夢の話をしてくれた。

44

2回目の手紙が届き、今度は差し迫つた様子が文面から伝わってきた。家にあるあの中国の住所に酒があるだけ送つて欲しいとの内容だった。

一応と書かれた住所は家にあるメモ書きと同様の住所だった。この通りの宛名で書けば大丈夫だと。田上には蔵の倉庫の鍵のありかを示す内容が私にはまた日本の卵焼きが食べたい旨の内容が申し訳程度終わりに示されていた。

45

田上は早起きして蔵へ向かった。それはかつての仕事場の奥にあった。朝もやがかかり山は霧に覆われまだ朝焼けがあたりを覆う寸前だった。

蔵の鍵を開け中に入る。蛍光灯の電気がまぶしかった。

蔵の地下と手紙にはあつた。そこに酒はあるらしかった。型に仕切られた木箱に人の頭より少し大きめの土甕が6つづつ。ふたになる板。釘。金槌。全部用意が調っていた。

蔵の中にはリアカーがあり、来る途中郵便局も見た。

頭の中で運ぶ段取りのイメージがつくとほつとした。

敷いてある莫薩に座りあたりを見回す。ひんやりとして静かだ。そして清潔でとぎすまされる。仕事場みたいだ。

手伝おうかと言つたら断られた。

46

明日の朝一で行つてくるから卵焼きでもつくりて待つて居たの」とだった。

田上は朝の何時に出て行つたのか最近になつてよひやく床つてきた。

47

土田祭りだつてさ。

私は顛末を聞きたかつたのだ。

どうだつた。

と聞いたのに。家にさ酒あといいくつ残つてたつけ。ないよな、呑む分だけだもんな、一升瓶で、祭りだからと、ひと甕もつてきたり。大丈夫祭りよじこよせてあつた。

郵便局にさ、酒持つて行つて送る手はずをつけて、もう知つてゐるんだ担当者が居て、富田さんのお孫さんかいとかいわれてさ。で、祭りの時も頼みますよつてぐあいに、えつて感じでリアカーしまいに蔵に戻つてもう一度確かめたら大きな甕があつて最初は中身水だと思つてた。実際ひとつは水。で、もうひとつがさ、それだつた。蓋の裏に祭の字があればね、そうでしょ。大きさも大きさだし、とも送り用には向かない。だから、家にもつてくるのもほんと骨おれた。だからさ休み休み、今の今までかかつたつていうわけ。

48

家の玄関の脇の暗がりに大きな土甕が一つ。私の腰以上の高さ。ウエストはようやくひと抱えできるかできないか。これどうやって運んできたのつていうへり。しかも二つ。片方は水といわなかつたか。

後で聞くと、地下から出すとき郵便局の職員が手伝つてくれたらしい。家まで車で運ぼうかとも言われたらしいが後は申し訳なくなり

アカーディコまで。

祭りは土曜日と日曜日。小さな御輿と山車が町中を練り回つて歩き、各屋家の前で踊りや太鼓を披露する。そのときの振る舞い酒と力水。美緒。私を呼んでいる声。

すこししたらさ散歩がてら、資料館つてのがあるらしいへど、そこに行ひ。

家に戻ると田上はすでに寝息を立てていた。

49

はつ、ハツと女の声が聞こえる。「ひむか」としか思えない。何度も聞こえる。オレを呼んでいるのだと気づき起きた。

魂の牢獄。世界から世界へ。オレはここではハツと呼ばれている。ハツはうまくなじんでいる。オレもそうする。問題はない。

単位のわからない紙幣をいくらか相手に見られながら数えて、いいと言われるまで渡す。7000何とか、OKね、相手は急に「一〇二」口し出して愛想がよくなる。オレの手を取り掌にチケットの券を握らせる。さらにサービスなのかもうひとつおまけをくれる。オレはもうそこに並ぶ必要などなく。向かつてトンネルのような通路を走るだけだった。「ゴールまで走るだけだった。

始めに約束ありき。起きて向かつところは資料館。祭りの展示場。それなりに楽しめた。どこか懐かしい趣。女、美緒。連れだつて歩く。

いつだつてうまくいく。ハツはうまくやつている。

今回はどこまで進む。

まさか資料館に女を連れて行くことだけが役割でもあるまい。健全な精神は健全な肉体に宿る。

頭はよい。

初、初。

何度目かに呼ばれても問題はない。愛想はそよぐなくても良さそう

うだ。

その日はぼんやりと過ごした。
祭り、祭りがあるのだという。

オレは早くもその為にオレがあるのだと思つたが慎重な初はまだ確信に至らない。

仕事は終わつてゐるようだつた。酒を送り、酒と水を準備し、後は当日がくるのを待つだけなのだ。

オレはその管理人なのだろうか。酒と水と女と家を守るための男。時が来るまでここで待つ。

力はそれほどないようだが頭は切れる。ここにこうしてゐる理由はそれほど感じられなかつた。ここにこうしてゐる理由など考え出したらまたすぐに元のところに戻されそうだ。

すすめるのだ。とにかく一步でも前へ進めるのだ。それが生きている意味ではないのか。

そつとして抜け出せる。この世界から本当に抜け出せる。この肉体からおさらばである。

まるでオレは二三の類だ。庚申の獣だ。そしてオレはこうと言つ。男はうまくやつていました。準備は万端です。いつでも祭りに入りますよ。

50

祭りは一日間に渡つて行われる。2体の担ぎ御輿と4体の山車が街中を練り歩く。

普段は見ない子らや大人や動くのもままならないお年寄りが通りにでてくる。

朝から昼、昼から夕、街のどこからちらでちんどんどんの音が鳴り人の賑わいが続く。夕から夜にかけては提灯がともされ幻想的な風景を醸し出す。御輿や山車は一日日の行程を終えゆっくり神社に帰つて行く。

次の日、山から発する朝靄のなか、御輿や山車の担い手達の代表が神社の倉庫の鍵を開ける。朝はひんやりしてまだ寒い。御輿、山車が外に出される。朝日を浴びてそれは神々しい。今日ここをでて最後に戻ってきて奉納の舞いを踊る。神の乗る御輿は飾られ神は山におかえりになられる。一年の始まりであり終わりでもある。

小休止

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4232/>

兵士不純41 50

2011年1月27日07時54分発行